

私が看護に教わったこと

「私、看護師になりたい」初めてそう思ったのは、小学校 3 年生の時、病院のベッド上でのことだった。私は入院生活で看護師を身近に感じており憧れを抱くようになっていた。だが、当時この夢を母にさえ言うことができずにいた。生まれつき右耳の聴力が低い私は、聴診器を使うことができないと諦め、看護師にはなれないと決めつけていたからだ。

その後、次第に周囲の目が気になり始め、私は耳を隠しながら生活するようになった。隠しているために、そのことが見破られて陰口を言われているのではないかと 1 人で怯えたり、相手の会話が聞きとれない際に聞き返すことができずにもどかしい思いもした。誰にも助けを求められずにいた私は、本を読んで必死に答えを探した。そこで、私を苦しめていたのは耳の障害そのものではなく、自分自身が作っていた環境なのだと気付いた。それからは少しずつ周囲に打ち明けていき、家族にも本音でぶつかるようになった。

高校生の時、障がいを理由に免許が与えられないという看護師の絶対的欠格事由が廃止されていることを知り、私の夢は後押しされた。だが、私に命を預かる看護師の仕事ができるだろうかという不安と迷いは消えなかった。しかし、自分を変えることによってできた、同じ夢を持った親友が私の背中を押してくれ、私は看護の道に進むことができた。

看護学生になった私は、個性豊かな同じ志を持った仲間たちから、今のありのままの自分でいいのだということを知り、学生生活を通じて、自分の思いを表出し、自分をさらけ出せるようになっていた。心配をしていた聴診器はやはり問題があり、血圧測定の際に私だけ測定数値が合わなかったが、仲間や家族との練習や先生の個別指導の成果もありできるようになった。実習では自分の無力さに悩むことも多かったが、自分だけではなくチームとして患者さんに関わっていることを感じながら成長することができた。そして、「誰にでも苦手なことはあって、その時には人に頼ったっていい、その代わりに自分のできることを考えてやればいい。悩んだ時には自分でだけで抱え込まず表に出していけばいい。」ということを知り、人との繋がりを強く感じた学生生活であった。

この春、私は看護師になる。期待と同時に不安も大きいですが、自分らしく過ごすことのできた 4 年間に自信を持って、日々前進していきたい。そして、自分の体験を生かして、疾患が患者さんにどのような影響を与えているのか、目の前の患者さんにとって最善のことがされているのかを考えながら、患者さんの心の声を聴けるような、訴えられない声にも耳を傾けられるような、患者さんに寄り添える看護師でありたいと思う。